

□ 研 究 所 ・ 試 験 場 め ぐ り □

果樹試験場安芸津支場

安芸津支場のおかれた広島県安芸津町はゴルフの岡本綾子と相撲の安芸島の故郷であり、また、海のくかきと酒造りの杜氏の町としても有名である。当支場は風光明媚な瀬戸内海の中でも、最も島が多い海を見おろす山の上にあり、広島県果樹試験場と隣合せて建っている。

交通の便でいうと、山陽新幹線およびJR山陽本線三原で下車し、JR呉線に乗り換えて安芸津駅下車、車で約7分である。

当支場の生い立ちは、昭和43年4月に園芸試験場安芸津支場として設立され、まず落葉果樹育種研究室（育種第1研究室）と常緑果樹育種研究室（育種第2研究室）が設置された。その後、栽培研究室および病害研究室（44年）、虫害研究室（45年）がそれぞれ設置された。昭和48年には機構改革により果樹試験場安芸津支場として発足し、現在、育種、育種法、栽培、病害および虫害研究室の5研究室がある。その間、常緑果樹育種を担当していた育種第2研究室が育種法研究室として昭和61年に新設され、それまで行っていたカンキツの育種事業は中止された。またそれに伴って果樹試験場の樹種別分担としては、ブドウ、カキおよびキウイフルーツ

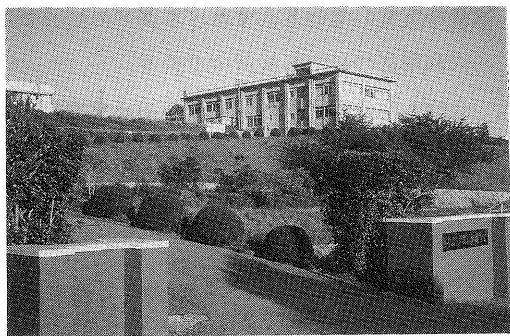
などの落葉果樹に主力をおいた研究を行っている。

研究員が15人の小じんまりした試験場であるが、わが国で最初にキウイフルーツが導入され、現在のような大きな栽培面積にまで発展した基礎を築くとともに、最近のバイオテクノロジーにさきがけて細胞融合による新品種‘オレタチ’を作出するなど、多くの研究成果が得られている。ごく最近では、寒地向きブドウ新品種として‘ノースレッド’の育成、甘柿の‘新秋’、‘陽豊’などの品種を育成し、病害研究室ではエチレン発生剤を用いたキウイフルーツの追熟技術を開発している。

植調剤の研究は、開場後に栽植した落葉果樹と常緑果樹が成木に達した50年に入ってから本格的に行われるようになった。当時は栽培研究室の他に落葉果樹の育種を行った育種第1研究室と、常緑果樹育種を行った育種第2研究室が、それぞれの研究室において植調剤の利用と関連した研究課題の中で実施していた。50年代後半からは主として栽培研究室が植調剤の研究を担当している。このように、支場の生い立ちから果樹試験場では唯一、落葉果樹と常緑果樹の2樹種について植調剤の研究を行ってきた。また、植調剤の研究はかなり労力を要するものが多いが、安芸津支場は研修生制度がないこともあって、興津支場や口之津支場ほどには行われなかった。しかし、今後も本場および他の支場と連携しながら生育調節剤の研究を実施していく。

雑草防除研究

常緑果樹、落葉果樹を問わず、栽培管理の省力化のためには雑草防除研究が不可欠であり、そのために除草剤の利用が重要であることはいうまでもない。除草剤試験は栽培研究室が中心



となり、50年代始めから行われた。カンキツ園を対照に試験を行ったものとして、ナブ乳剤、ラウンドアップ、バスタ、ハービエースなどがある。これらの薬剤については、試験開始当初から登録に至るまで試験された。

近年、糖度の高い高品質ミカンの生産が叫ばれるようになって、一昔前の清耕法のような栽培管理の園が多くなり、あるいは省力化のために、除草剤が多用される状況にある。そのため、除草剤の効率利用が以前にも増して重要になっている。一方、ミカン農家の中には、除草剤の連用によって糖度が上がらなくなったという人もあり、また、最近の地球環境問題への関心の高まりとともに、化学製品など（肥料、農薬）をできるだけ少なくし、安全な食品を生産する技術開発が注目されている。すなわち、地球環境保全から考えて、地球にやさしい栽培技術の確立（LISA農業）が叫ばれるようになっていく。したがって、今後雑草防除研究についても、生態系調和型の技術開発が重要になってくると考えられる。

落葉果樹については、当支場はブドウ、カキおよびキウイフルーツの樹種別分担をしているので、これらについても今後新しい除草剤の開発に協力したいと考えている。

生育調節剤研究

生育調節剤については、落葉果樹を対照とした試験では、50年代始めにブドウ縮果病に対するクレフノンの効果について検討した。その後、50年代後半から現在までは、カキを中心にブドウ、キウイフルーツに対する新梢伸長抑制剤について研究している。いずれも2次伸長を抑制して誘引労力の省力化を図ると共に、栄養生長を抑制して高品質果実の生産を目的としている。

特にカキでは、近年低樹高栽培に対する関心が高く、樹形改造の他、新技術の開発も各県で行われている（地域重要研究）。その際、生育調節剤による新梢伸長抑制を必要とすることが考えられる。そこで、カキの新梢伸長抑制剤として、パクロブトラゾール、ウニコナゾールおよびプロヘキサジオンの効果について試験している。いずれも新梢伸長効果が認められているが、2次伸長を抑制することによる果実品質向上効果までは得られていないので、これらの薬剤の効果的な利用法についてさらに研究を行っていくつもりである。

常緑果樹に対する試験としては、ウンシュウミカンの摘果剤について40年代後半から行われた。主な薬剤としてはNAA、フィガロンについて試験が行われ、NAAは有効な摘果効果が認められ、実用化されたが未登録のため現在は使用されていない。それに変わる薬剤としてフィガロンが試験され、摘果剤と果実品質向上剤として有効な結果が得られた。これらの摘果剤の試験は、いずれも興津支場および口之津支場と連携してかなり長い時間をかけて試験が行われた。さらに、近年はウンシュウミカンの果実品質向上剤や新梢伸長抑制剤について試験を行っている。新梢伸長抑制剤としては、KUH-833Fのカンキツに対する作用性について、抑制期間、果実品質および翌年への影響について試験を実施している。また、本薬剤の施設栽培への利用についても検討中である。

今後も生育調節剤の研究は栽培研究室が中心となって、カキ、ブドウおよびキウイフルーツについて、除草剤と生育調節剤研究課題を本場と協力して進めて行く。

（果樹試験場安芸津支場栽培研究室長 小野祐幸）